

論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名：木村 理子

木村理子氏の博士学位請求論文「モンゴル演劇成立史：1920-1930年代 革命の演劇期」は、日本において空白であったモンゴル近代演劇に関する最初の通史的研究であり、今後の同分野の研究に対する雛型を提示した画期的な試みである。1920年代から1930年代におけるモンゴル演劇の成立過程を中心に、1990年代以降の民主化をも視野に入れて、モンゴルにおける演劇実践とソビエト化とその脱却という錯綜する現代史との関係を、伝統文化の破壊と再生をキーワードとして考察した意欲的な作業と言えるだろう。

本論文の独自性は、モンゴルにおいて1930年代の粛清によって演劇資料が廃棄され、その演劇史でも無視されていた史実を、広範な文献調査と長期のフィールド・ワークにもとづく考察によって掘り起こした実証性にある。モンゴル国立歴史中央公文書館などの収蔵資料や1990年代以降に公開された旧ソビエトのモンゴル関連資料、さらにはモンゴルで出版された演劇関係のほぼすべての文献を照合し、論述が行われている。本論にはモンゴル国立ドラマ劇場における上映作品年表や多数の図版資料が附され、さらに主要な戯曲と歌曲の歌詞を翻訳した資料集が付録として編まれており、なかにはモンゴルで一部失われたものも含まれている。欧米を含めて先行研究のない分野だけに、その資料的価値は高い。また、モンゴル社会におけるソビエト化の影響を多面的に分析し、民族文化とされるものにも屈折した背景があるとし、1990年代以降の民主化の過程で演劇が果たした役割を1920年代の演劇体験との構造的な平行性として解明したが、そこにはフィールド・ワークによる成果が活かされている。

本論文は全四章からなる。まず、序文において、モンゴル人民革命の概略が記述され、モンゴルにおける社会主義政策とは、ソビエト＝ロシアの提供したモデルを模倣することであり、演劇も外的強制力によって「ソビエト民族文化」が形成され、伝統文化が破壊されるが、この一種の植民地文化が伝統文化を再生させ、それによって伝統文化の存続がもたらされると主張する。この屈折した視点は、モンゴル現代史を考える上での重要な示唆を与えている。

第一章「人民革命以前の状況」では、木村氏のモンゴルでの博士学位取得論文である「仏教儀礼チャムの研究」をもとに、人民革命以前のモンゴルにおける演劇文化がまとめられている。清朝の禁令によりモンゴル語による演劇行為が存在せず、演劇文化は仏教儀礼と一部の寺院で上演された宗教劇や草原で歌われる口承文芸の世界であり、都市には中国人による芝居があったにすぎないとする。資料も少なく、モンゴルにおいてもまとまった記述のない部分であり、論証を支える深い知識は高く評価されるどころだが、すでに失われた演劇を記述する点でさらなる工夫を要するという意見が、審査委員から出された。

第二章「人民革命と演劇サークル」は、1920年代にアジ＝プロ演劇を行うアマチュア団体が軍官学校に結成され、宣伝活動として上演を行う過程でモンゴル演劇が形成されていた経緯を記述する。それはソビエト政策によって形成された外来文化ではあったが、口承文芸と伝統的な詩歌の形式に、中国の舞台技術とロシア赤軍の宣伝隊の混成であり、そこにソビエト文化による新たな民族文化の雛型があったとする。第二章の記述は、モンゴルでは1930年代の粛清によってほぼ抹殺された歴史を扱い、本論文の重要な要素となっている。モンゴル演劇は、ソビエトの社会主義政策によって導入されるモデルを模倣することで段階的に形成されてきたと本論文は主張するが、モンゴルの演劇青年らが混沌としたなかで作り上げていったアジ＝プロ演劇の軌跡は、粛清以降の社会主義演劇を考える際にも重要であるという指摘は、肯定されよう。

第三章の「ソビエト演劇への道程——消えた1920年代の演劇史」では、1929年のコミンテルンの政策転換を受け、ロシア人指導員による西洋演劇の本格的な導入と劇場の時代が詳述される。さらに1937年の粛清により、それ以前の演劇が一扫され、社会主義リアリズム演劇をモデルとするソビエト文化が形成され、今日のモンゴル演劇に至る歩みが示される。粛清による破壊が単純化を生み、「ロシアの経験をモデルにして模倣する」という原則が機能するに至るとする主張は、説得力をもつと言えよう。

第四章「人民革命と民主化運動——モンゴルの「生きた新聞」」は、1989年のモンゴル民主化運動と、その後の10年にわたる民主化への移行期が、演劇的行為との関連で分析される。大衆的プロパガンダの動きや広場でのパフォーマンスなど、民主化を促した一連の運動は1920年代のアジ＝プロ演劇やネップ期の演劇の再来を連想させるもので、そこに構造的な平行性があると指摘している。この章は、木村氏のフィールド・ワークの成果が十分に発揮された部分であり、広い視野と深い見識が評価されたところである。

最後に本論文は、1920年代から1930年代のモンゴル演劇活動の分析から、民主化以降のモンゴル社会の発展を考察する上でも有効なモデルを導き出し、そのアジテーション活動の型がモンゴル社会と文化の形成に影響を与えていると結論づけている。

全般的にみて、粛清など政治的なさまざまな制約から通史的に語られることのなかったモンゴルの演劇史を、アジテーション活動のモデルとして概括し、初めての通史として記述した功績は高く評価される。その点で、審査委員の意見は一致した。モンゴルでも類書のないものであり、ソ連の衛星国における民族文化を考察する上でも、一定の参考価値をもつものであろう。文献資料によって演劇状況を記述するという困難さは、本論文でも散見され、一部に適切とは言えない表現があるとの指摘もなされたが、それらは瑕疵にすぎず、本論文の成果を大きく損なうものではないという点でも、審査委員の意見は一致をみた。

したがって、本審査委員会は全員一致で、木村理子氏の提出論文を博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定した。